実践のまとめ（第３学年　国語科）

新発田市立第一中学校
教諭　渡辺　みつ枝

１　研究テーマ

古典と自分とのつながりを実感する生徒の育成
～資料を比べて読み、見出した問いに批評文を書く活動を通して～

２　研究テーマについて

(1) 研究テーマ設定の意図

伝統的な言語文化の教育については、中央教育審議会答申（2016）の中で、「小・中・高等学校を通じて、古典に親しんだり、楽しんだり、古典の表現を味わったりする観点、古典についての理解を深める観点、古典を自分の生活や生き方に生かす観点、文字文化（書写を含む）についての理解を深める観点から整理を行い、改善を図ることが求められる。」と述べられている。

ただ、古典の学習が自分の生活や生き方に活きることを実感しながら学んでいる生徒は多くないと思われる。これまで生徒が古典を意欲的に読めるよう様々な学習活動を組んできたが、「古典は言葉が難しい」、「何のために読むのか分からない」という生徒の声が実際に聞かれている。これまでの授業ではどうしても内容理解や表面的な活動に終始しており、生徒が「他の作品も読んでみたい」と読む意欲を高めることができるような主体的な読みの力を育む視点が欠けていた。４月のＮＲＴの結果からも「漢字の読み、古典・表現技法」に弱さが見られた。古典を学習する意義については、渡辺(2018) が「①人間に関する認識の深化　②現実認識の深化　③文化の根の発見　④豊かな表現の獲得」の４点を挙げ、これらの意義を踏まえた生徒の主体的な学びを想像することが古典の学びが学習者の言語生活に生きることになると主張している。

これらのことから、生徒が古典を学習する際には、「何のために読むのか、何の役に立つのか」という意義について生徒自身が実感できる手だてが必要なのではないかと考えた。

そのための有効な手立てとして、先行研究では廣中(2011)が複数の古典作品において「比較して考える」という思考活動を通して、問いをもって古典を読み、作品を評価・熟考させている。作品を評価・熟考することを通して、古典と自分とのつながりを考えることは、生徒にとっての古典を読む意義につながると考える。先行研究を踏まえ、本研究でも、複数の資料を比べて読み、そこにあらわれた違いから書き手の思考を考えることを通して、作品を評価・熟考させる。こうすることで、読み取った古典の世界を自分とのつながりの中でとらえ、自分の言葉で表現できる生徒の姿を目指したい。

(2) 研究テーマに迫るために

①　「おくのほそ道」の「平泉」の章段と、「曾良旅日記」との二つの資料を読み比べ、内容の違いから問いを持つ。

平泉の章段について、「おくのほそ道」では、「かねて耳驚かしたる二堂開帳す。」と始まる一方で、芭蕉に随行した河合曾良の「曾良旅日記」では、「五月十三日　（中略）経堂は別当留守ニテ不開。金鶏山見ル。」と始まる。ここから、芭蕉は「経堂と光堂が開帳されていた」と述べているのに対し、曾良は「別当（役人）が不在のため、経堂は開いていなかった。」と述べているという違いが読み取れる。単元の中で平泉を訪れたときの芭蕉の感慨を読み取っている生徒達は､後半の部分も事実を忠実に描いた場面であることを想定して読

み進めると考えられる。どちらも古文と現代語訳を提示し、この二つの資料のズレに気付かせ、「なぜ芭蕉は事実と異なることを書いたのか」という問いをもたせたい。

② 批評文を書く活動を通して、作者の創作の思いと、自分との繋がりをとらえる。

芭蕉の「おくのほそ道」創作への思いや、作品の良さについて根拠をもって書かせることで、自分の生き方や考え方に生かしたいことについて考えさせる。生徒にとって古典の学習が「昔の作品の読み取り」で終わるのではなく、「今も昔も変わらない人間の思い」や「これからの自分の生き方」につながるものになるよう、学習を進めたい。

(3) 研究テーマに関わる評価

① 芭蕉の創作にかける思いについて、根拠をもとにして、自分の考えを 200 字以上で書くことができている生徒が 80%以上いる。（ワークシート）

② 批評文の中で、芭蕉の創作への思いについて共感できる点や、今後の自分の生き方に活かしたい点について書くことができている生徒が 80%以上いる。（ワークシート）

３ 単元と指導計画

(1) 単元名

古典に学ぶ　教材名「おくのほそ道」（「現代の国語３」　三省堂）

(2) 単元の目標

・歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむことができる。
【知識及び技能（3）ア】

・文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えることができる。【思考力、判断力、表現力等Ｃイ】

・文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて自分の意見をもつことができる。【思考力、判断力、表現力等Ｃエ】

・言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする。【学びに向かう力、人間性等】

(3) 評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	①歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しんでいる。【（3）ア】	①「読むこと」において、文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えている【Ｃイ】 ②「読むこと」において、文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて自分の意見をもっている。【Ｃエ】	①作者のものの見方や考え方を捉えようとしたり、作品を読み深めようとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画（全７時間　本時６／７時間）

次 (時数)	学習内容	学習活動 ◎主な課題	主な評価規準と方法
1 次	・単元の目標を捉える。 ・「月日は」の章段の内容か	・単元の目標や評価について知り学習に見通しをもつ。	思・判・表①

（2）	ら芭蕉の旅への思いを捉える。	◎「月日は」の章段から、芭蕉は旅に対してどのような思いを抱いていたのだろうか。	芭蕉の旅への思いをとらえている。【ワークシート】
2 次 （2）	・「平泉」の章段の内容から芭蕉の思いを捉える。 ・「立石寺」の章段の内容から、芭蕉の思いを捉える。	◎平泉で、芭蕉は何に対して涙を流したのだろうか。 ◎芭蕉の俳句からは、どのような心情や情景が伝わってくるだろうか。	思・判・表① 芭蕉の思いをとらえている。【ワークシート】 情景や心情についてとらえている。【ワークシート】
3 次 本時 （3）	・芭蕉の創作の思いをとらえる。 ・「おくのほそ道」の芭蕉の創作の思いと自分との繋がりについて考える。 ・学習を振り返る。	・二つの資料を比べて読む。 ◎芭蕉が事実と異なることを書いたり、俳句に推敲を重ねたりしたのはなぜだろうか。 ◎芭蕉の思いを踏まえて、「おくの細道」の批評文を書こう。	知・技① 作者の思いを文章を根拠に想像している。 【ロイロノート】 思・判・表② 作者のものの見方や考え方をとらえ、生き方や人生について自分の考えをもっている【ロイロノート】

4　単元と生徒

(1) 単元について

松尾芭蕉の「おくのほそ道」は、作者の旅に向ける思いと、旅先での思いとがつながり、訪れた土地での深い洞察と鋭い感覚とが記された、日本文学の名文である。３年間の古典学習の後半に位置づけられ、しかも３年間の学習の中で扱う紀行文は「おくのほそ道」のみである。単元を通して芭蕉の創作への思いに迫り、自分との繋がりを意識させたい。

「月日は」の章段では、現代の旅と、芭蕉の旅とを比較し、人生が旅であり、旅の中で生きたいとする芭蕉の思いを捉える。「平泉」の章段では、藤原氏三代と源義経の栄枯盛衰の舞台である平泉の様子から芭蕉が抱いた無常観を捉える。

単元の終わりに、「平泉」の「中尊寺」の部分に着目し、「おくのほそ道」と、芭蕉に同行していた弟子の河合曾良の「曾良旅日記」とを比べて読む。単元の中で平泉を訪れたときの芭蕉の感慨を読み取っている生徒達は、後半の部分も事実を忠実に描いた場面であることを想定して読みを進めると思われるが、「曾良旅日記」を提示し、内容の違いについて問いをもたせる。また、「立石寺」の「閑かさや岩にしみいる蝉の声」の俳句の推敲の過程を提示する。これらのことから、「芭蕉が事実と異なることを書いたり、俳句に推敲を重ねたりしたのはなぜだろうか」という課題（問い）を提示する。単なる旅の記録ではなく歴史に残る文芸作品として仕上げようとした芭蕉の強い思いを感じ取らせたい。

また、その芭蕉の思いから、自分の生き方や考え方に活かせるところはないか考えて、批評文を書く。「おくのほそ道」が「単なる昔の人の考え」ではなく、「現代に生きる自分に役立つもの」としてとらえることができるよう、自分との繋がりを意識させたい。

(2) 生徒の実態（男子 16 名　女子 15 名　計 31 名）

ペア学習やグループ学習ではお互いに意見を交流でき、落ち着いて学習に取り組める生徒達である。古典の学習では、１年時には『竹取物語』の学習で登場人物の心情を読み取りながら読み、２年時は『平家物語』の学習で歴史的背景に注目して人物の心情を読み取るとともに、

異なる伝本を比べて読み、古典の表現の工夫について考えをもつことができた。

３年生の俳句の単元では、俳句の味わい方を学んでおり、「おくのほそ道」でも、既習事項を用いながら芭蕉の創作への思いに迫らせたい。

５　本時の展開（令和４年 11 月４日実施）

(1) ねらい

資料を比べて読むことを通して、芭蕉の創作にかける思いについて文章を根拠に自分の考えをもつことができる。

(2) 展開の構想

本時では、「平泉」の「中尊寺」の部分に着目して、「おくのほそ道」と、芭蕉に随行していた河合曾良の「曾良旅日記」とを比べて読む。プリント資料として古文と現代語訳を提示し、二つの資料のズレに気付かせ、「なぜ芭蕉は事実と異なることを書いたのか」という問いから文章の記述を根拠にして自分の考えをもたせる。交流を通して自分の考えをまとめる。

(3) 展開

時間 （分）	学習活動	教師の働きかけ 予想される生徒の反応	□評価　　○支援 ◇留意点
	目標：資料を読んで、芭蕉の創作の思いをとらえよう。		
(10)	・資料を比べて読み、内容や表現の違いから問いをもつ。	○「平泉」の章段をペアで音読する。 ○「平泉」の章段について、芭蕉に同行していた河合曾良の「曾良旅日記」を読む。 ・天気や、他にも違うところがある。 ・経堂は見られなかったようだ。 ・なぜ同じ所に行ったのに、内容が違うのだろう。 ○どちらが本当のことを書いたのか予想する。 ・曾良が事実でないことを書く必要はなさそうだ。平泉でも、芭蕉は見えていないものを見えているように語っていた。	◇プリント資料で現代語訳とともに提示して、比べて読めるようにする。 ○ペアで話し合わせてから、全体で発言させる。
	課題：芭蕉が事実と異なることを書いたり、俳句に推敲を重ねたりしたのはなぜだろうか。		
(10)	・根拠をもとに自分の考えをもつ。	○ロイロノートに自分の考えを書く。 ・よりよい作品を作りたかったから。 ・読む人に芭蕉の感動を伝えるためには、事実と違うことを書いたり、推敲を重ねたりすることが必要だと思ったから。	□根拠をもとに自分の考えをもつことができている。【ロイロノート】
(20)	・交流して、考えを広げたり深めたりする。	○班で、考えを交流する。 ・より良いものを作りたかったから。 ・一句の芸術性を高めるために推敲を重ねたのだろう。 ○班で出た考えを全体で交流する。 ・事実と違うことを書くほうが、読む人に印象を強くすることができたから。	◇ロイロノートで、シートを送り合い、考えを視覚化する。 ◇ロイロノートで、班での交流シートを画面で共有しながら発表する。
	発問：芭蕉にとってより良い作品とは、どんなものだろうか。		

		○ペアで話し合い、何人か発表する。 ・後世にも残るもの。 ・憧れた古人のように、歌枕の地を巡って作った自分の理想の紀行文。 ・平泉については、「実際に見た」とした方が、読者に強い印象を抱かせることができたのだろう。強く読者に訴えることの出来る作品が、芭蕉にとってより良い作品なのだろう。	
(10)	・交流で出た考えを参考にしながら、自分の考えを再考し、まとめる。	○交流を通して考えたことをもとにして、もう一度自分の考えをまとめる。 ・おくのほそ道に、「かねて耳驚かしたる二堂」とあるように、芭蕉は平泉に行く前からこの土地のことをよく知っていたのだろう。自分の理想とする紀行文に仕上げたいという芭蕉の思いがあったから、事実と異なることを書いて読者に平泉について強い印象を抱かせたかったのだろう。	◇もう一度ロイロノートに自分の考えをまとめさせる。提出箱に提出したものを画面で共有する。 □芭蕉の創作にかける思いについて文章を根拠に自分の考えをもつことができたか。【ロイロノート】
	まとめ：芭蕉が事実と異なることを書いたり推敲したりしたのは、理想とする紀行文に仕上げ、後世にも残る作品にしたいという強い思いがあったから。		
	・本時の学びを振り返る。	○振り返りを書く。 ・今日の学習で、資料を比べて読んだことで芭蕉が強い気持ちで「おくのほそ道」を書いたことが分かった。「平泉」や、「立石寺」の章段ももう一度読み直してみたい。昔の作品だけど、今の私たちにも通じる思いがあるように思った。	◇ロイロノートに今日の授業で分かったこと、芭蕉の創作への思いに対する自分の考えを書く。

(4) 評価

・資料を比べて読むことを通して、芭蕉の創作にかける思いについて文章を根拠に自分の考えをもつことができたか。【ロイロノート】

5　実践を振り返って

(1) 授業の実際

① 学習課題を把握する場面

導入で、「おくのほそ道」と「曾良旅日記」の平泉の章段を読み比べた。古文と現代語訳を提示したところ、内容の違いについて、生徒はすぐに気が付いた。ここで、「どちらが違うことを書いたのだろう。」と問うと、ほとんどの生徒が「芭蕉が事実と違うことを書いた。」と考えた。これは前時までに、「平泉」では「芭蕉は目の前に見えていないものも見えているかのように語った。」ということを確認していたためであると考える。ここから、「なぜ芭蕉は事実と異なることを書いたり、俳句に推敲を重ねたりしたのか」という課題につなげた。

② 考えをもつ場面

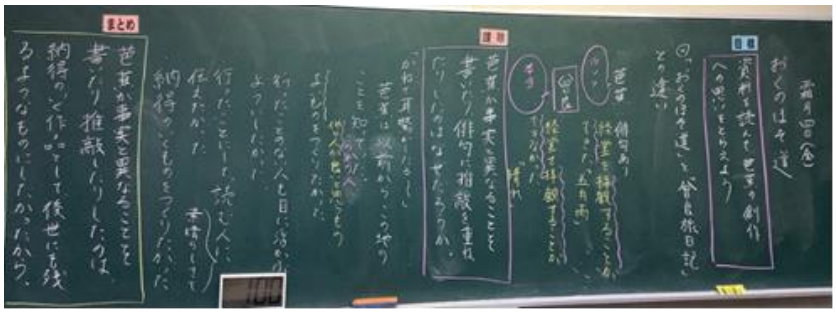
ロイロノートのシートに、資料の文章を根拠にして自分の考えをまとめた。既習事項や現代語

訳に書いてあることをもとにして、一人一人が自分の考えをもつことができた。しかし、根拠を抜き出して書けている生徒は多くなかった。

③ 考えを広げる・深める場面

ロイロノートで考えを書いたシートを送り合い、それぞれが仲間の考えを手元に置きながら話し合った。ロイロノートを使うことで、お互いの考えを可視化しながら話し合うことができた。また、班の中で出た様々な意見を発表させ、全員で共有した。「良いものを作りたかった」という意見について、「芭蕉にとってより良い作品とは、どんなものだろうか。」と全体に問い返したところ、「他の人が良いと思うもの」、「あこがれの古人のような作品」、「売れるもの」という考えが出た。

全体交流の場で、授業者が発問（深める問い）を投げかけたことで、視点が定まり、より深く課題について自分の考えをもつことにつながった。



④ まとめる場面

交流の後、もう一度自分の考えをまとめた。初めは資料文章を根拠にして書けていなかった生徒も、他の生徒の考えを聞くことで書くことができた。また、他の生徒の考えを聞いて、納得できた部分をふまえてまとめることができた。（図１：交流前の生徒の考え、図2：交流後の生徒の考え）

自分の考え・根拠（古文や現代語訳）・理由づけ（～だから）
⭐具体的な記述をもとに説明しよう。

「以前から驚嘆して」と書いてあるので芭蕉は経堂と光堂をとても楽しみにしていた。しかし、実際には見ることができなかったので聞いたことがある噂を書いた。噂を書いたのは、杜甫や西行法師のように後世に残る作品を作りたかったから。

図１

自分の考え・根拠（古文や現代語訳）・理由づけ（～だから）
⭐具体的な記述をもとに説明しよう。

古文に「以前から驚嘆して」と書いてあるので、芭蕉は経堂と光堂をとても楽しみにしていた。しかし、実際には見ることができなかったので聞いたことがある噂を書いた。噂を書いたのは、尊敬している杜甫や西行法師のように後世に残る作品を作りたかったのだろう。

他の人の話を聴いて、「たくさんの人に読まれる作品にしたかった」という意見にも納得した。もしかしたら、「おくのほそ道」が多くの人に読まれる（売れる作品）にするために、事実ではないことも書いていたのかもしれない。そのほうが、平泉の良さや、芭蕉の思いを伝えることができたのだろうと思う。売れる作品、多くの人に読まれる作品をつくるというのは、熱意がないとできないことだと思った。

図２

(2) 研究テーマに関わる評価について

① 芭蕉の創作にかける思いについて、根拠をもとにして、自分の考えを200字以上で書くことができている生徒が80%以上いる。→81%

26人中24人（92%）が自分の考えを持つことができた。その中で初めから根拠をもって書けた生徒は26人中8人（31%）であった。

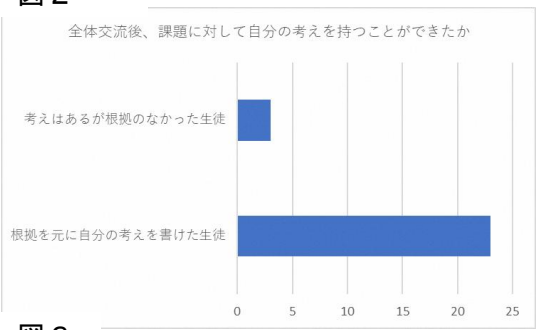


図３

班、全体での交流を通して、根拠となる記述を全体で確認することができたが、初めから根拠をもとにして自分の考えを述べることのできる手だてが必要であった。全体交流の後には、図３のように26人中23人（81%）が、資料の文章を根拠にして自分の考えを書くことができた。

② 批評文の中で、芭蕉の創作への思いについて共感できる点や、今後の自分の生き方に活かしたい点について書くことができている生徒が80%以上いる。→85%

単元の終わりに、芭蕉の創作への思いをふまえて批評文を書く活動を行った。

私は「おくのほそ道」を読んで、芭蕉の語学や歴史に対する情熱を感じました。芭蕉は自分の余生を旅にあてて自らの訪れたかった場所を訪れ、後に「おくのほそ道」を読む人に、より日本の歴史の良さを伝えていました。旅に出る前にも自分が訪れたいところについて調べていました。芭蕉が訪れることを待ち望んでいた場所に行き、書いた「おくのほそ道」には、きっとどんな旅行ガイドブックよりもネットの記事よりも奥州・北陸の名所の良さが書かれているのだと思いました。芭蕉が人生を懸けてそれらの良さを伝えたこと、事実を曲げてまで伝えたかったそれらの良さこそ「おくのほそ道」の良さなのだと思いました。私も芭蕉のように後世に何かを残すことはできなくても、人生後悔しないようにやりたいことは努力は実らないとしてもやっておくようにしたいです。（生徒A）
おくのほそ道を読んで、昔の人のものの見方と現代のものの見方の違いに驚きました。特に、人生は旅のようなものだというところから当時の旅は命をかけるほどの危険があったと実感させられました。また、平泉の「秀衡らが跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。」という文章からその土地の情景が正確に伝わり、素晴らしいと思いました。このように、芭蕉の俳諧の素晴らしさは読み手に正確に伝える表現力だと思いました。芭蕉のいいものを作りたいという創作にかける思いから、私も何かに取り組むときは、「よりいいものを作りたい」という熱意を表して積極的に行動していきたいと思いました。（生徒B）

批評文を書く活動の中で、芭蕉の創作への思いと、自分の生き方とを結び付けて考えられた生徒は、26人中22人（85%）であった。生徒A、Bのように、「私も芭蕉のように後世に何かを残すことはできなくても、人生後悔しないようにやりたいことは努力は実らないとしてもやっておくようにしたいです。」や「何かに取り組むときは『良いものを作りたい』という熱意を表して、積極的に行動したい」という生徒の記述は、古典から読み取ったことを自分の生活に生かしていこうとするものである。

批評文の中で自分と結び付けて書くことのできなかった生徒も、補助発問によって交流の論点が定まったことによって、自分が読み取った作品の価値について述べることができた。自分の生活や生き方に活かせる部分については、個別や全体で確認する手立てが必要である。

(3) 今後の課題

考えを広げる・深めるために交流の場でロイロノートを思考を可視化するツールとして使ったが、タブレット操作に集中してしまうなど、話し合いが深まらない班も見られた。考えを広げる・深めるために話し合いの質も高められるよう、論点を明確にするなどして系統的に指導していきたい。また、他の古典作品でも資料を比べて読むという手立ては有効なのか、先行研究や実践に学び、研究していきたい。

〈引用・参考文献〉

（１）中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』pp.127-130　2016

（２）廣中　淳『「おくのほそ道」と「曾良旅日記」を比較して自ら問いを解明する学びを育む授業づくり」月刊国語教育11月号　明治図書　2011

（３）髙橋邦伯・渡辺春美『シリーズ国語授業づくり　中学校古典－言語文化に親しむ』pp8-10　東洋館出版社　2018